

内容

序章

第一章 廃村と黒の城

第二章 染められる夜

第三章 露台の願い

第四章 千年の駒

第五章 最後の夜

終章

序章

終電を逃したのは、私の落ち度だった。

残業のあとで先輩に半ば無理やり飲み連れて行かれて、断り切れずに二軒目までついて行って、気がついたら深夜の路地裏で一人、傘も差さずに雨に濡れていた。私は昔から、押しに弱い。強く押されると嫌と言えなくなる。社会人になってもそれは変わらなかった。

冷たい雨粒が頬を伝って顎の先から落ちていく。スーツの肩の生地が雨を吸って重く、ストッキングの中までじわじわと水が染み込んでくる。コンビニの灯りもない、街灯一本きりの路地。スマホの充電は切れていた。ため息をついて空を見上げたとき。

頭上が、白く光った。

雷ではない。もっと柔らかくて、もっと不自然な光だった。乳白色の幕のようなものが、雨ごと私を包み込んで、足元の濡れたアスファルトの感触がふっと消える。落ちる。あるいは引き上げられる。どちらとも判断のつかない浮遊感。胃の腑が裏返って、まばたき一つする間もなく、視界が一面の白に塗り替えられた。

次に瞼を開いたとき、私は冷たい大理石の上に膝をついていた。

大理石。確かに大理石だ。子供のころ家族で行った美術館の床と同じ、ひやりと重い、磨き上げられた石の感触。膝小僧から太腿の裏に、ぞくりと冷気が這い上がってくる。スーツのスカートはまだ濡れていて、布越しの冷たさが二重になって肌を刺す。

顔を上げる。

息が止まった。

天井がない。いや、あるのだろうけれど、はるか高くにあつて私の目では捉えられない。代わりに見えたのは、ステンドグラスを通して斜めに差し込む幾筋もの光と、その光の中に浮かぶ細かな塵のきらめき。香炉の煙が立ちのぼっていて、嗅いだことのない薬草と樹脂の混じった匂いが鼻の奥を撫でていく。

そして、私を取り囲むようにして跪く、白い祭服の人々。

数えるのも億劫なほどの人数だった。男も女も、皆一様に頭を垂れて、片膝を石の床について、両手を胸の前で組んでいる。彼らの口から、低い詠唱のような言葉が連なって発せられている。意味は分からない。けれど耳に入った瞬間、皮膚の表面がぴりりと痺れて、産毛が一斉に逆立つ感覚があった。

ようこそ、聖女様。

その一言だけが、確かに日本語に聞こえた。

声の主は、祭壇の前に立っている、銀の縁飾りのついた長衣の男だった。年の頃は四十代半ばだろうか。整った顔立ちに、深い藍色の瞳。優しげな微笑を浮かべて、私に向かってゆっくりと両手を広げる。

「お待ちしております、月浦美咲様。私はアルテリア聖王国の王、アルバートと申します」

月浦美咲。

私の名前を、知っている。

心臓が一拍、跳ねた。喉の奥で言葉にならないものが詰まる。逃げたい、と思った。けれど膝が震えて立ち上がれない。濡れたスーツが体に張り付いて、自分の輪郭を頼りなくしている。

「……あの、ここは」

ようやく絞り出した声は、自分のものとは思えないほど擦れていた。

「異界より召し出された方には、いつも同じ説明をしております」

アルバートと名乗った男は、ゆっくりと私のそばまで歩み寄ってきて、片膝をついた。背の高い男が膝をつく、それでもなお私の目線より高い位置に顔がある。彼は私の冷え切った両手を、自分の温かな掌でそっと包んだ。

「ここはアルテリア大陸。我らの世界です。そしてあなたは、聖なる導きにより召喚された、千年に一度の聖女様にあらせられる」

聖女。

その単語が、頭の中で何度も反響した。意味は知っている。けれど自分に向けて発せられた言葉として聞くと、どこか他人事のように耳の奥で滑

っていく。

「我らはこの百年、闇の魔王ルシフェル・ノクスヴェイルなる存在に脅かされてまいりました。彼の者の手にかかり命を落とした民は数知れず、街は焼かれ、子らは攫われ、女は……」

アルバートはそこで言葉を切り、痛ましげに目を伏せた。長い睫毛が頬に影を落とす。芝居がかっている、と一瞬思っ、すぐにそんな失礼な感想を抱いた自分を恥じた。今、目の前で起きていることは、芝居でもドッキリでもない。床の冷たさも、香の匂いも、濡れたスーツの重さも、すべて本物だ。

「あなたの聖なる御力をもってしてのみ、彼の者を討ち果たすことが叶うのです。どうか、我ら聖王国に、いえ、この世界そのものに、お力をお貸しいただきたい」

アルバートが私の手の甲に、額を押し当てた。

一国の王だという男が、私のような何の取り柄もない一介の〇「に頭を下げている。その光景の現実味のなさに、私はかえって冷静になっていく自分を感じた。

断れる雰囲気では、なかった。

その日のうちに、私は王宮の最奥にある一室に通された。

通された、というよりは、運ばれた、と言ったほうが近い。立ち上がるうとしても膝が言うことを聞かず、結局、若い騎士に抱きかかえられるようにして長い廊下を運ばれていった。すれ違う使用人や衛兵たちが、皆一様に廊下の隅に寄って深く頭を垂れる。

与えられた部屋は、私の実家のリビングがすっぽり五つは入る広さだっ

た。天蓋つきの寝台、深紅のビロードの絨毯、暖炉、化粧台、そして窓辺に置かれた書き物机。化粧台の上には見知らぬ宝石類が惜しげもなく並べられていて、その隣に、丁寧に折りたたまれた一着のドレスが置かれていた。

「お疲れでございましょう。どうかお召し替えを」

部屋に控えていた老齡の侍女が、深々とお辞儀をして言った。穏やかな笑みを浮かべた、品のいい女性だった。彼女の手に従われて衝立の向こうへ回ると、生地の柔らかな白い室内着に着替えさせられる。濡れたスーツとストッキングを脱ぎ捨てたとき、皮膚が外気に触れて、思わず大きく息を吐いた。雨に冷やされた身体に、絹の重みが心地よかった。

ベッドの縁に腰を下ろすと、侍女が温かいハーブのような飲み物を運んでくれた。湯気の立つ陶器のカップを両手で包む。指先に少しずつ熱

が戻ってくる。

「……あの」

飲み物の表面に映る自分の顔を眺めながら、私は侍女に尋ねた。

「私の前にも、聖女様って、いらしたんでしょうか」

ひと呼吸ぶんの、沈黙があった。

たぶん、本当に短い沈黙だった。一秒もなかったかもしれない。でも私は、その隙間を聞き逃さなかった。

「ええ……ええ、おりましたとも。前の聖女様も、それはそれは、お優しい方でいらっしゃいました」

お優しい方でした。

過去形だった。

「その方は、今は……」

「お疲れでございましょう」

侍女が私の言葉を遮るように、にっこりと微笑んだ。とても丁寧な、訓練された微笑みだった。

「明日には討伐隊の方々との顔合わせがございます。今宵はどうかゆとりとお休みくださいませ」

彼女は深々と一礼すると、足音も立てずに部屋を出ていった。

私は一人、広すぎる部屋に取り残された。

その夜、私は眠れなかった。

寝台はびっくりするほどふかふかで、シーツは肌が滑るほど滑らかで、枕は雲を抱いているようだった。けれど、目を閉じても瞼の裏で何度も同じ場面が繰り返される。アルバートの優しげな微笑、侍女の遮るような笑

顔、そして、過去形で語られた前任者の存在。

寝返りを打ち、結局起き上がってしまった。

窓辺へ歩く。素足にひやりと触れる絨毯の毛足。重いカーテンを少しだけ引き開けて、外を覗く。

月が、赤かった。

まんまるな月だった。けれど、見たこともないような濃い、血の色をした赤。月の光に照らされて、王宮の白い尖塔がほの赤く染まっている。日本で見えていた月とは、まったく別の天体のように見えた。

ふと、足の裏に微かな振動を感じた気がした。

地下から、何かが聞こえる。

最初は空調か何かの稼働音かと思った。けれど耳をすませると、それは音というより声だった。ひそやかな、けれど大勢の人間が同時に唱えてい

る、低い詠唱。意味の分からないその響きが、磨き上げられた石壁を伝って、私の素足の裏まで届いている。

ぞくり、と背筋が冷えた。

絹の室内着の下で、肌に粟立つものがある。怖い、と直接的に思ったわけではない。ただ、ここは私の知っている世界とは違う場所で、ここで起きていることのすべてを、私はまだ何ひとつ知らないのだ、という実感だけが、ひたひたと胸の底に溜まっていった。

私はそっとカーテンを閉めた。

寝台に戻り、上掛けを胸まで引き上げて、目を閉じる。

眠れないまま、夜は明けていく。

翌朝、討伐隊との顔合わせの席で、私は初めて勇者ガレスと対面した。

肩まで伸ばした金の髪、海のような青い瞳、真紅のマントの下に光る銀の鎧。御伽噺から抜け出てきたような美貌の青年だった。彼は私の前まで進み出ると、優雅に片膝をつき、私の手を取って甲に唇を寄せた。

「お会いできて光栄です、聖女様。あなたを必ずお守りすると、剣に懸けて誓います」

甘やかな声だった。微笑みも、申し分のないものだった。

けれど。

彼の睫毛がほんの一瞬伏せられて、再び持ち上がったとき。私を見上げる青い瞳の奥に、何かを値踏みするような、冷たいきらめきが過つたのを私は見逃さなかった。市場で陳列された果物を、傷んでいないか確かめる客のような目だった。

心臓の奥が、ずっと冷えた。

手の甲に押し当てられた唇は熱かったのに、その熱は私の皮膚の上を通過するだけで、私の中までは届いてこなかった。

「……よろしく、お願いします」

私は微笑んだ。微笑めた、と思う。〇「生活で身につけた、当たり障りのない笑顔。

ガレスの背後で、神官たちが何かを話し合っている。私たちが出立する日取り、行軍の経路、補給の手配。事務的な打ち合わせのはずなのに、彼らの声音にはどこか興奮が滲んでいた。新しい商品を仕入れたばかりの店主のような、抑えきれない期待。

その期待の対象が、私だった。

顔合わせが終わり、再び自室に戻されるとき、私は廊下の窓越しに王宮の中庭を見下ろした。中庭の奥にひととき大きな尖塔があり、その地下へ

と続く階段が、薔薇の蔓に半ば隠されるように口を開けていた。

昨夜、足の裏に響いた詠唱。あれはおそらく、あの地下から聞こえていたのだろう。

知ってはいけない、と本能が囁く。

知らなければならぬ、と理性が言う。

私は窓辺で立ち止まり、しばらくその尖塔を見つめていた。やがて衛兵に「お部屋までお戻りを」と促され、私は素直にその場を離れた。

数日後、私たちは魔王城へ向けて出立する。

すべての違和感を胸の奥にしまい込んだまま、私は聖女として旅立つことになる。

第一章第一章 廃村と黒の城

出立から、四日が続っていた。

馬車の窓から見える景色は、王都を離れるにつれて緑から灰色へと色を失っていった。風には微かに硫黄の匂いが混じり、北の空には常に黒い雷雲が居座っている。その雷雲の奥に、まだ豆粒ほどの大きさで、けれど確かに、黒い城の影が見え始めていた。

魔王城。

あれが、私の目的地。

馬車のクッションは硬く、長時間の移動に膝の裏が痺れていた。隣で書類に目を落としているのは、聖王国の若い神官、ライナス。私の旅の世話役であり、監視役でもある人だ。窓の外を見ている私に気づくと、彼は柔

らしく微笑んだ。

「お疲れでしょう、聖女様。今夜は廃村の跡を野営地として使いますので、もうしばらくのご辛抱を」

廃村。

その言葉に、私は黙って頷いた。

日が傾きかけたころ、馬車は緩やかな下り坂を抜けて、半ば崩れた石壁に囲まれた村跡に到着した。

村、と呼ぶには、もはや形を保っているものが少なすぎた。屋根が落ちた家屋、苔むした井戸、骨組みだけになった水車。けれど、生活の名残は確かにあった。割れた陶器の欠片、雨ざらしになった木製の揺り籠、半分だけ残った祭壇。誰かがここで、当たり前の毎日を送っていたのだという

証が散らばっていた。

馬車から降りて、私はゆっくりと村跡を歩いた。ライナスは「あまり奥には」と言いかけて、けれど聖女の行動を制止しきれず、少し離れた距離からついてくる。

倒壊した家屋の隙間に、それは横たわっていた。

最初は流木かと思った。けれど近づくにつれて、それが流木ではないことが分かった。

白く晒された、人骨だった。雨風に晒されて、肉も衣服も残っていない。頭蓋骨と肋骨、伸ばした片腕の指の骨は原型をとどめていた。

その指の先に、子供のものらしい小さな骨が、寄り添うように転がっていた。

私は唇を引き結んで、しゃがみ込んだ。

大人の頭蓋骨の側頭部に、明らかに人為的な裂け目があった。鋭利な刃物で叩き割られた跡。子供の小さな肋骨にも、同じような切創がいくつも走っていた。

魔王のせい。

ここに来るまでの道中、ライナスから繰り返し聞かされてきた説明が頭の中で反響した。魔王の手の者がこの村を襲い、村人を皆殺しにした。だからこの村は廃村になった。だからあなたの聖なる力で、彼の者を討たねばならない、と。

けれど。

刃物で叩き割られた骨は、剣で殺された人間のものだ。爪や牙ではない。火傷の跡もない。これは、人間が、人間を殺した跡だった。

「聖女様」

背後から、静かな声がかかった。ライナスの声だった。

「お劳しいでしょう。この村は、魔王の眷属に襲われた哀れな村です。どうかその方々の魂が、安らかであらんことを」

私はゆっくりと立ち上がった。

振り向かずに、骨の上に視線を落としたまま、聞いた。

「……魔王の眷属というのは、剣を使うのですか」

数秒の沈黙があった。

「……ええ。中には人型を取る者もありますゆえ、武器を扱うことも」

「そうですか」

私は、それ以上は問わなかった。問えば、彼を困らせるだけだと分かっていた。彼自身が、本当のことを知っているかどうかも怪しかった。下級の神官は、上から渡された脚本通りの説明をするだけなのかもしれない。

私は屈み込んで、村跡に咲いていた小さな白い花を一輪摘み、骨の手のひらに置いた。

黙礼して、その場を離れた。

その夜、私は割り当てられた天幕の中で、毛布にくるまっていた。

外では討伐隊の兵士たちが焚き火を囲んで談笑している。話し声と、薪の爆ぜる音と、誰かが歌っている古い行軍歌。場違いなほど明るい夜だった。今日歩いてきたあの村跡のことなど、誰の頭にも残っていないかのようだった。

不意に、天幕の入口の布が、外側から微かに揺れた。

風ではない。誰かが、入ってこようとしている。

「失礼します、聖女様」

声がして、布の隙間から金の髪が覗いた。勇者ガレス。彼は許可も待たずに天幕の中へ入ってきた。

焚き火の灯りを背負って立つ彼の姿は、童話の挿絵のように整って見えた。鎧は外し、ゆったりとしたシャツ姿。両手に何かを持っている。湯気の立つ陶器の杯。

「お休みのところ、申し訳ございません。よく眠れぬ様子でしたので、温かい蜂蜜酒をお持ちしました」

優しい声だった。微笑みも、完璧だった。

けれど私は、毛布の縁を握る指先に、知らず力をこめていた。

ガレスは天幕の真ん中、私のすぐそばまで歩み寄って、片膝をついた。杯を私に差し出してくる。受け取らないわけにはいかない雰囲気だった。両手で杯を受けて口元まで運ぶと、蜂蜜の甘い匂いに、何か別の薬草の匂

いが混じっていた。

飲まなかった。

唇を当てるだけで、傾けなかった。

「……明日も早いですから」

杯を傍らの小卓に置いた。

ガレスは僅かに眉を上げたが、すぐに微笑みを取り戻した。

「ご賢明です。けれど、もう一つだけ。聖女様、あなたをお守りするのが私の役目ですから」

彼の手が、無造作に私の頬に伸びてきた。

私は反射的に、首から下げていた銀の聖印に触れた。召喚の日に神官たちから渡された護符。聖女の祈りに反応して光る、と説明された小さな銀のメダル。私が触れた瞬間、聖印は柔らかな白い光を放ち、ガレスの指先

と私の頬の間に、薄い光の壁が割って入った。

ガレスの動きが止まった。

彼は数秒、その光を見つめていた。それから、ゆっくりと手を引き、立ち上がった。

私を見下ろす青い瞳は、もう微笑んでいなかった。

「……失礼いたしました」

短い一礼。

彼は天幕を出ていった。布が閉じる直前、彼の口元が小さく動いたのが見えた気がした。生意気な、とでも言ったのかもしれない。あるいは、私の聞き間違いかもしれない。

杯の中の蜂蜜酒を、私は外の茂みに捨てた。

翌日からの行軍は、表向きは何も変わらなかった。

ガレスは相変わらず爽やかに微笑み、夜には食事の席で物腰柔らかく談笑した。けれど、彼の青い瞳が私の聖印に向ける視線には、明らかな警戒の色が混じるようになっていた。私は彼に対して、笑顔を返しながら距離を保った。聖印を片時も外さず、夜は天幕の入口に椅子を寄せて寝るようになった。

そして、五日目の夕刻。

私たちはついに、魔王城の麓に到着した。

馬車を降り、初めて間近で仰ぎ見た城の姿に、私は息を呑んだ。

黒い。

ただ黒い、というだけでは言い表せない、深い深い黒だった。光を吸い込んで何も返さない、夜そのものを石材として削り出したかのような色。

複数の尖塔が天を貫き、城全体を取り巻くように、巨大な黒い茨が絡みついている。城の上空には常に渦を巻く雷雲が垂れ込め、ときおり紫の稲妻が走っていた。

この城のどこかに、私が殺さなければならないとされる存在が、いる。城門の手前で、討伐隊の作戦会議が行われた。私は端から呼ばれずに、けれど聞こえる位置にわざわざ立った。私は聖女である前に、自分の運命を知る権利のある一人の人間だった。

「……聖女様には、単身で正面から進んでいただく」
ライナスが、私の方を見ずに言った。

「魔王は聖なる力に強く反応します。彼の者は必ず、聖女様御自らを迎えるために玉座にとどまるはず。我ら討伐隊はその間に、城の側面から侵入し、隙を突いて奇襲を」

四、と頭の中で言葉が落ちた。

私を、四にする計画。

予想していなかったわけではない。あの蜂蜜酒の夜から、彼らが私を「兵器」として消費するつもりであることは、薄々察していた。それでも、はつきりと言葉にされると、心臓の冷え方は別だった。

私はゆっくりと、討伐隊の輪の中へ進み出た。

ガレスがこちらに気づき、即座に微笑みを取り繕った。

「聖女様、お打ち合わせに加わっていただくほどの内容では」

「分かりました」

私は彼の言葉を遮った。

「単身で正面から、参ります」

ガレスの微笑みが、ほんの一瞬、固まった。

「……寛大なるご決断、感謝いたします」

私は黙礼して、踵を返した。

彼らが私を背中から斬る可能性は、考えなかったわけではない。けれど計画通りに動いてもらわなければ、私はこの状況のどこにも逃げ場がなかった。城に入って、魔王とやらに会って、それで何が起きるかを、自分の目で確かめなければ。

私は深呼吸を一つして、城門に足を踏み入れた。

謁見の間までは、誰にも会わなかった。

黒い大理石の床、漆黒の柱、深紅の絨毯。蠟燭一本灯されていないのに、城内は不思議と薄明るかった。空気は冷たく、けれど不快ではない、清潔な冷たさ。私の足音だけが、長い回廊に響いていた。

大きな両開きの扉が、私の前で音もなく開いた。

謁見の間の奥、長い段を上がった先の玉座に、それは座っていた。

息が止まった。

怪物ではなかった。獣でもなかった。

銀の髪が、肩よりも長く、絹の糸のように艶やかに流れ落ちていた。陶磁器のような白皙の頬。形のよい唇。そして、こちらを見つめる、深い、深い、紅い瞳。漆黒の長衣をまとい、玉座の肘掛けに頬杖をついて、彼は私を見ていた。

背後で、足音がした。討伐隊が予定通り、側面から突入してきたのだ。武器を抜く音、戦闘態勢の構え。

玉座の男が、片手をゆるりと上げた。

ただそれだけで。

私の背後で、空気が固まる音がした。振り返ると、討伐隊の兵士たちが、透明な結界の中に閉じ込められて、剣を振り上げた姿勢のまま動けなくなっていた。一人残らず。ガレスでさえ、青い瞳に怒りを浮かべたまま、瞬きもできずに固まっている。

「……俺を殺しに来たそうだな、聖女」

低い、よく響く声だった。皮肉と疲労と、ほんの僅かな笑みの混じった声。

彼は玉座から立ち上がり、ゆっくりと段を降りてきた。漆黒の長衣の裾が、絨毯の上を蛇のように滑る。私は動けなかった。聖印が胸元で、迷うように小さく明滅していた。

彼は私の前まで来ると、私の顎に指先を添えて、上向かせた。指の温度は、思っていたよりも、ずっと普通だった。

「だが残念だ。お前は今日から、ここで暮らすことになる」

彼が囁いた瞬間、私の視界の縁が、ふっと暗くなった。

倒れる、と思った。

倒れる前に、彼の長い腕が私の背中と膝裏に回り込み、軽々と私の身体を抱き上げていた。胸元の漆黒の生地には、私の頬が押しつけられる。彼の鎖骨のあたりから、雪と、何か甘い香木の混じった匂いがした。

意識が遠のく直前、私は彼を見上げた。

紅い瞳が、私を見下ろしていた。

その奥に、ほんの一瞬だけ、何か疲れたような、寂しいような――そんなものが見えた気がして。

私の思考は、そこで途切れた。

頬に当たる、滑らかな麻の感触で目が覚めた。

最初に思ったのは、シーツが信じられないほど上等だ、ということだった。実家のものとも、王宮で使っていたものとも違う。長く愛用されてきたものだけが持つ、柔らかさと重さが同居した感触。鼻先には、洗いたての布の匂いに、微かに乳香に似た香木の香りが混じっている。

ゆっくりと瞼を持ち上げた。

高い天井。漆喰ではなく、磨かれた黒い石を組み合わせて構成された、複雑な格天井。淡い銀色の光が、どこからともなく差し込んでいる。窓の方角から差している光だが、太陽の光ではない。月光だ。

私は、どれだけ眠っていたのだろう。

謁見の間で意識を失ってから、丸一日が過ぎているのか、数刻しか経っていないのか、判断する材料が何もなかった。喉が渴いていた。空腹は感

じない。指先や足の先まで意識を巡らせてみても、痣のひとつ、擦り傷ひとつ、見当たらなかった。

寝台の天蓋から、銀糸で刺繍された深紅のカーテンが下りていた。指先で触れてみる。重い。本物のビロードだった。私の身体を覆っているのは、見覚えのない長袖の寝間着。私が城に着いたとき身につけていたはずの巡礼服も、聖印も、今は見当たらなかった。

起き上がろうとして、めまいに似た感覚に襲われた。手のひらでこめかみを押さえ、深く息を吐く。身体の節々が重い。けれど不思議と、痛みも、傷も、何ひとつ残ってはいなかった。

寝台から足を下ろし、絨毯の毛足を踏みしめながら、窓辺へと歩いていった。

窓は、嵌め殺しになっていた。

いや、窓枠そのものは観音開きの構造をしている。けれどその開閉部に細い銀の格子が幾重にも嵌め込まれていて、人の腕一本通せるかどうかという隙間しか確保されていなかった。

外に視線を投げた瞬間、息を呑んだ。

眼下、はるか下方に、黒い塔の根元と、その周囲を取り巻く茨の森が広がっていた。私が今いるのは、塔の最上階の、おそらく一番高い場所。地表まで、軽く見積もっても十数階分の高さがある。雲が、私と同じ高さで流れていた。

逃げ道は、ない。

扉が、控えめに叩かれた。

返事をする前に、向こうから静かに開かれる。

入ってきたのは、年の頃が三十前後と見える女性だった。深い濃紺の侍女服、銀の髪を後ろでひとつにまとめ、首元に小さな銀の鎖を巻いている。

瞳の色は深い紫。私の知る人間の瞳の色ではなかった。

「お目覚めでございましたか、聖女様」

声は低く、よく通る。冷たくはないが、過度な親しみもない、訓練された侍女の声音だった。彼女は手にした銀盆を傍らの卓に置き、深く一礼した。

「シャロンと申します。本日より、あなた様のお世話を仰せつかりました」
お世話。

その言葉の温度に、私は曖昧に頷いた。

「……ここは、どこ」

「魔王城、月見の塔の最上階にございます。主の居室からは、最も離れた

場所をご用意いたしました」

「ご用意」

私は思わず繰り返した。客人を迎えるような言い方だった。

シャロンは表情を変えずに、銀盆の上のカップに、湯気の立つ茶のよう
なものを注いだ。

「主は、あなた様を傷つけるおつもりはございません。少なくとも、肉体
については」

少なくとも、肉体については。

その留保の意味を、私はすぐには測れなかった。

「他のものは、傷つける、ということ？」

シャロンは、私の問いには答えなかった。代わりに、淹れたばかりの茶
を私の前に置いて、再び一礼した。

琥珀色の液体から、薔薇に似た香りが立ちのぼった。私はカップを手にとったが、すぐには口をつけなかった。蜂蜜酒の夜のこと、まだ皮膚に残っている。

シャロンが、私の躊躇いを見て取ったらしかった。

「毒は入っておりません」

彼女は淡々と言った。

「もし主があなた様の命を望まれるなら、私の手を借りるまでもございません」

ぞっとするほど、合理的な答え方だった。私はそれ以上拒む理由を見つけれず、薄く一口だけ含んだ。喉の奥に、温かなものがゆっくりと落ちていく。指先まで血が巡るような感覚。

「……あなたのような方を、私は前にも見たことがある気がします」

ふと思いついて、口にしてしまった。

「ここに、私の前にも、誰か……いましたか」

シャロンの紫の瞳が、ほんの一瞬だけ揺れた。けれど、それだけだった。彼女は深く一礼して、答えなかった。

「主は、今宵、あなた様のもとへ参られます」
今宵。

窓の外で、雲の流れが少しだけ早くなった気がした。

シャロンが下がったあと、私は一人で部屋を歩き回った。

机の引き出しは空。書棚には古い詩集が数冊。クローゼットを開けてみると、中には、まだ一度も袖を通されていない、新品の衣装がいくつも吊るされていた。

その中に、ひと際、目を引く一着があった。

一番手前にかけられた、白い絹の夜着。胸元から下が、ほとんど透けていた。生地は薄く、二重にも三重にもなっていない。腰のあたりに細い飾り紐があるだけで、留め具らしい留め具はどこにもない。袖は短く、肩のあたりは紐一本で吊られているだけ。

誰が見ても、これはそのため^三の衣装だった。

胸の奥が、ひやりとした。

扉に駆け寄り、把手に手をかけて強く引く。鍵はかかっている。すんなりと開いた。けれど扉の外には、半透明の薄い光の膜が張られていた。指先を伸ばして触れる。指が膜にめり込み、それ以上は通らない。聖印を持っていない私の手では、押しても叩いても、その膜は揺らぎもしなかった。

胸元に、そつと手を当てた。いつもなら、ここに聖印の重みがあるはずだった。神官から渡されたあの銀のメダル。けれど今、その代わりに感じたのは、自分の心臓の鼓動だけだった。

目を閉じて、聖なる魔力を呼び起こそうとした。あの召喚の日から、私の中には確かに、温かな光のようなものが宿っていた。怖いとき、苦しいとき、それが胸の奥でじんわりと広がって私を支えてくれる感覚があった。けれど今、いくら呼びかけても、その光は遠くで小さく揺らめいているばかりで、指先まで巡ってくる気配がなかった。

城に、力を吸い取られている。そう確信した。

第二章第二章 染められる夜

日が傾き始めるころ、シャロンが再び現れた。

彼女は無言で、クローゼットからあの白い夜着を取り出した。

「お召し替えを」

短く、それだけ言った。

私は唇を噛んだ。拒否しても、無駄なのは分かっていた。逆らってこの夜着を着ずに彼を迎えたところで、結末は変わらないだろう。私は震える指で、自分の寝間着の紐をほどいた。

肌に触れた絹は、ひやりと冷たく、それでいて滑らかだった。背中に流れ落ちた髪が、生地の上を滑る感触に肩が小さく跳ねる。胸元のラインは、思っていたより深く切り込まれていて、鎖骨から谷間までがほとんど隠されていらない。腰の飾り紐は、少しでも乱暴に扱われたら、すぐにほどけるだろう。

絹は私の身体に張り付くようでありながら、同時に肌の上で滑ってどこにも留まらなかった。乳房の輪郭が、生地越しにくつきりと浮かび上がっている。胸の頂が、生地に擦られるたびにぴりぴりと小さな違和感を訴えてくる。寒いせいだ、と思うとした。けれど、室内は決して寒くなかった。

太腿の内側にも絹が触れている。歩くたびに皮膚を布が撫でていく。下着も与えられていなかった。生地の下に、自分の身体が、何の隔たりもなく晒されている感覚。

姿見の前に立たされた。

鏡の中の私は、私ではないみたいだった。

頬は紅潮し、唇は乾いて、瞳には怯えと、それから――それから、何か別の感情が、薄く滲んでいた。私は私の表情を直視できなくて、視線を逸

らした。

「ご用意は整いました」

シャロンは深く一礼して、部屋を出ていった。

日が、完全に落ちた。

窓の外の空が、紫から漆黒へと染まっていく。室内の燭台が、いつの間にか勝手に火を灯していた。淡い橙色の光が、白い夜着の輪郭をなぞって、シーツの上に長い影を落とす。

私は寝台の縁に腰を下ろし、両手を膝の上で組んだ。

怖い。

そう思った。怖いはずだった。

私はこれから、知らない男に身体を暴かれる。それが今日、ここで起き

ることだと分かっている。私の意思は問われていない。聖女としての清廉も、月浦美咲としての貞節も、何ひとつ尊重されない場所に連れてこられている。

怖いはずなのに。

謁見の間で見上げた、あの紅い瞳が、瞼の裏に浮かんで離れなかった。私を見下ろしたあの男の、長い銀の睫毛。指先で顎を持ち上げられたときの、思っていたよりずっと普通だった指の温度。倒れる私を抱き上げた、あの腕の力。

頬が、勝手に熱くなる。

膝の上で組んだ手の、指の関節が白くなるほど力をこめた。これは違う、と自分に言い聞かせた。これは、恐怖の裏返しのかだ。それ以上の意味はない。

太腿の内側で、生地が擦れる。少しだけ脚を組み直そうとして、その擦れる感触に、自分の腰の奥が小さく疼くのを感じてしまった。私はとっさに膝を強く合わせた。下着のない太腿の付け根は、合わせると皮膚同士が直接触れて、かえって生々しかった。

胸の頂は、もうずっと前から、絹を押し上げて固くなっていた。何もされていないのに。誰にも触れられていないのに。私の身体は、これから起きることを期待しているかのように、勝手に準備を始めている。

扉の向こうで、足音がした。

心臓が、跳ねた。鎧の音はしない。重い長衣の裾が床を擦る、布擦れの音だけ。

扉が、音もなく開いた。

彼は、入り口で立ち止まり、私を見ていた。

漆黒の長衣を脱いで、薄い絹のシャツに変わっていた。胸元のひもがゆるく結ばれていて、白皙の鎖骨が覗いている。銀の髪は緩く後ろに流され、紅い瞳が燭台の灯りを受けて、ほの暗く輝いていた。

ゆっくりと、寝台の前まで歩いてきた。私の前に立ち、長い指で、私の顎をすくい上げた。

見上げる体勢になる。彼の瞳が、すぐ近くで私を覗き込んでいる。

「お前の聖なる力を」

低い声が、囁いた。

「俺の色に、染め替えてやろう」

息ができなかった。

彼の親指が、私の唇の上を、ゆっくりとなぞった。下唇から上唇へ。

「抵抗してもいい。だが、無駄だ」

彼の顔が、傾きながら近づいてきた。

唇は、まだ来ない。最初に触れたのは、私の頬だった。

ひとつ。柔らかな感触。それから、もうひとつ。今度は頬骨のあたりに。短く、けれどはっきりとした熱が、皮膚に焼きつくように落とされる。

私はその熱が皮膚に広がっていく感覚を、息を止めて受け止めた。

燭台の灯りが、ふっと、揺らいだ。

頬に落ちた二度目の口づけが、すぐに三度目になり、四度目になり、もう数えられなくなった。

彼の唇は乾いてはいなかった。湿ってもいない。ちょうど人肌の温度のまま、私の頬骨の上を、こめかみへ、耳の縁へとゆっくり滑っていく。耳朶を唇に挟まれた瞬間、首筋の産毛がぞわっ♡と一斉に起き上がるのが分

かった。

「あ……っ」

声が、勝手に漏れた。

彼が小さく笑う気配がした。耳元で、彼の吐息が薄く触れる。

「もう、こんなに反応するのか」

からかうような囁きが、鼓膜を直接撫でる。私は唇を噛んで、肩をすくめた。耳の縁を、舌先がぺろり♡となぞった。今度は逃げ場がなかった。

「んっ♡、やあ……っ♡」

唇が、耳から首筋に降りていった。鎖骨を辿り、谷間の手前で止まる。

その経路の、首と肩の境目のあたりで、彼の唇は一度立ち止まった。歯がそっと皮膚に立てられ、軽く食まれる。痛くはない。けれど噛まれた皮膚から熱が放射状に広がっていった、肩から腕の付け根、胸の上のほうま

で、ぞわぞわ♡と痺れていく。

もう一度、首筋を強く吸い上げられた。ちゅうっ♡と短い水音。離れた場所に、皮膚が引っ張られた感触だけが残った。

彼の長い指が、私の胸元の飾り紐に触れた。一回、二回、軽く弄ぶように引っ張る。やがて、ほどけた。

しゅるり、と絹の擦れる音。

肩から夜着が滑り落ちていく。胸が外気に触れ、それだけで乳首が硬く尖った。先ほどまで、絹の生地擦られて準備していた身体が、剥き出しの空気にさらに反応する。乳輪まで、薄く色づいてプクプク♡と充血しているのが、自分でも分かった。

ルシフェルの紅い瞳が、私の素肌を上から下まで、ゆっくりと舐めるよ

うに見ていく。視線だけで、皮膚の表面が熱くなった。

「綺麗だな」

低い声で、彼が呟いた。

その一言の温度に、胸の奥がきゅっ♡と縮こまった。皮肉でもなければ、嘲笑でもない。本当にただ、見たままを言葉にした、それだけの響きだった。

彼の指先が、私の左の乳房にそっと触れた。

手のひら全体ではなく、まず人差し指の腹だけ。下乳の柔らかなふくらみを、すうっ♡と下からなぞり上げてくる。指が乳房の側面を回り込み、頂のすぐ手前で、ぴたりと止まった。乳首の手前で焦らされた身体が、勝手に胸をつき出すように反ってしまふ。

ルシフェルが意地悪く笑った。

「触ってほしい場所が、分かりやすい」

「やつ……、言わない、で……」

私がそう言い切る前に、彼の手のひら全体が、左の乳房をやんわりと包み込んだ。

ゆっくりと、その重みを確かめるように揉みしだく。指の腹が乳房の柔らかさに沈み込み、形を歪めていく。むにゅっ♡ ふにゅっ♡ と肉が指の間から逃げ、また戻る。爪の先がカリカリ♡と乳輪の縁をなぞり、円を描くように何度も往復する。

「あんっ♡、あ……っ♡」

乳首の手前ばかり、彼の指は焦らした。乳輪を撫で、ふくらみを揉み、けれど一番尖った頂には触れない。じれったさで、腰の奥がきゅん♡きゅん♡と疼く。

「触って、ほし……」

言いかけて、自分の言葉に唇を噛んだ。

ルシフェルが小さく息を吐いた。笑った気配。

「素直だな」

その瞬間、彼の指が、ようやく乳首をくりっ♡と摘んだ。

「ひぁッ♡」

声が裏返った。

摘まれた乳首は、すでに痛いくらい固くなっていた。指の腹が、頂をくりくり♡くりくり♡と転がし、人差し指と親指の腹で、優しく、けれど執拗に挟む。もう片方の手が右の乳房に伸び、そちらの乳首も同じように摘まれる。両方同時。

「あ、ア♡、ああ……っ♡、両方、だめ……っ♡」

言葉が崩れていく。両方の乳首をくりくり♡と転がされながら、彼の唇が下りてきた。右の乳首に、舌先がペロッ♡と触れる。

「ふぁ……っ♡」

舌先は、最初は軽く、頂の表面をぺろぺろ♡と舐めるだけだった。やがて唇が乳輪ごと頂を含み、ちゅっ♡と吸い上げた。

ちゅばっ♡

ちゅくっ♡

じゅるっ♡

吸われるたびに、乳首から胸の奥に、ぞくぞく♡とした熱が走る。私の知らない感覚だった。胸を吸われて、こんなに腰の奥まで響くなんて、知

らなかった。

彼の口の中で、私の乳首はさらに勃ち上がっていた。生暖かな唾液で濡らされ、舌の腹で軽く押し潰されたかと思うと、舌先で頂をくにゅっ♡くにゅっ♡と転がされる。歯の縁が、ほんの掠めるように頂に当たって、その瞬間に腰がびくっ♡と跳ねた。彼が口を離れた時には、頂はてらてらと唾液で光っていた。

反対側の乳首は、彼の指の爪先がカリカリ♡と引っかいている。柔らかな乳輪までもが充血して、プクプク♡と腫れていく感覚。乳首そのものが、ルシフェルの口の中で、舌先に押し潰されたり、軽く歯を立てられたりして、その刺激のひとつひとつが、私の腰をびくっ♡びくっ♡と跳ねさせた。

舐められていない方の乳首にも、彼は時折顔を移して、舌全体でべろおっ♡と舐め上げる。両方の頂が同じくらい唾液で濡らされ、両方の乳輪が

同じくらい充血して、左右対称にプクプク♡と腫れていく。

「あ、ア♡、それえ……っ♡、気持ち、いい……っ♡」

自分の口から漏れた言葉に、自分で驚いた。私は、気持ちいい、と言っ
てしまった。

ルシフェルが乳首を口から離し、見上げてきた。紅い瞳が、ほの暗く笑
っている。

「もっと、気持ちよくしてやろう」

彼の唇が、谷間から臍へ、臍から下腹へと降りていった。胸を弄ばれて
いた間に、夜着はすでに腰の下まで完全にずり落ちていた。彼の唇が下り
ていく経路の、皮膚という皮膚に、熱の跡が残っていく。

太腿の内側、付け根に近いところに、彼の唇が押し当てられた。ちゅっ

♡と短く吸われて、跡が残ったのが分かった。

「ひっ……んっ♡」

反射的に膝を閉じようとした。けれど彼の両手が、私の膝の内側にしっかりと添えられて、ゆっくりと、左右に開かれていく。閉じられない。脚を開かされたまま、無防備な部分が彼の目の前に晒される。

「もう、こんなに濡れているな」

彼の声が、皮肉ではなく、感心したように低くなった。

顔から火が出る思いだった。彼に触れられる前から、待っている間からずっと、私の秘所はじんわりと潤んでいた。今、脚を開かされたことで、内腿の付け根に溜まっていた愛液がつうつ♡と一筋、太腿のほうへ伝い落ちる。

「聖女のくせに」

そう呟いた彼の指が、私の秘所の入り口にそっと触れた。

中指の腹が、割れ目に沿って、上から下へとゆっくり一度なぞる。

ぬちゅ……っ♡

粘ついた音が、寢室の静寂に響いた。

「ああ……っ♡」

たったそれだけの接触で、私の腰が大きく跳ねた。

彼の指は、すぐには中に入ってこなかった。割れ目を上下になぞり、クリトリスのある場所を指の腹でくりっ♡と探り当てる。包皮の下に埋もれていた小さな粒が、彼の指に押されて、ぷくっ♡と顔を出した。

包皮を下から押し上げるように指が動くと、頂が剥き出しになる。空気に触れただけで、ぴりぴり♡と痺れるような感覚。そこへ彼の指の腹が、唾液と愛液をまとってヌルヌル♡に滑りながら触れてきた。直接の接触に、

私の腰が大きく仰け反る。「ここか」

囁くと同時に、彼の指の腹が、クリトリスをくりくり♡と転がし始めた。

「ああ♡、んうっ♡、そこ、それ、だめ……っ♡」

声が裏返り、嗚咽混じりになる。クリトリスは、自分でも触れたことのないような感覚を放ってきた。指で転がされるたびに、お腹の奥でじんじん♡とした熱が膨らみ、勝手に腰が浮いてしまう。

ルシフェルの唇が、クリトリスのすぐそばに降りてきた。

舌先が、ぺろっ♡と一度、味見するように舐めた。

「んうっ♡」

ぺろぺろ♡

じゅるっ♡

ちゅぱっ♡

べろおッ♡

舌先で軽く転がされたかと思うと、唇で覆われ、ちゅうつ♡と吸い上げられる。指で転がされるよりも、ずっと直接的で、ずっと容赦のない刺激。私の太腿が痙攣し、足の指がきゅっ♡と丸まった。

舌でクリトリスを責められている間に、彼の中指が、膣口にあてがわれた。

ぬぷ……っ♡

ゆっくりと、一本目が入ってくる。私の中はトロトロ♡に蕩けていて、彼の指を抵抗もなく呑み込んだ。

ぬちゅう……ッ♡

「あ、アッ♡、や、だめ、いっぺんにっ♡」

頭の中が、白くなり始めた。

膣の中の指が、二本に増えた。

ぬぷっ♡ くちゅっ♡

二本の指で、膣壁を内側からぐっと押し広げ、指の腹で、ある一点をトントン♡と叩き始める。

「ひっ♡、ひあっ♡、それえ……っ♡」

ぬちゅ♡

くちゅくちゅ♡

ぷちゅちゅ♡

ぐちゅん♡

ぬぢゅっ♡

接合部から漏れる音が、もう恥ずかしさを通り越して、自分の身体が出している音だとは信じられないほど、みだらに響いていた。

「あ、ア、あぁっ♡、なんか、くる、くるっ♡、だめっ♡、だめ、止ま
てっ♡」

お腹の奥で膨らんでいた熱が、もう逃げ場を失って、私の中で破裂寸前まで膨らんでいた。クリトリスを唇で強く吸い上げられた瞬間、指の腹が奥のしこりを一際強く押し上げた。

目の前が、真っ白になった。

「んぅぅぅぅっ♡」

声が裏返り、長く尾を引いた。

腰がびくびくっ♡と跳ね、足の指がきゅうっ♡と丸まる。膣壁が彼の指を強く締めつけ、指の周りで愛液がトロトロ♡と溢れ出すのが分かった。お尻のあたりまで濡れていく。

絶頂が長く長く続いて、やがてゆっくりと引いていく。

ルシフェルが、唇をクリトリスから離し、私を見上げた。彼の口元が、私の愛液で濡れて光っていた。

「達したな」

低い声に、満足が滲んでいた。

「だが、まだだ」

膣の中の指が、ゆっくりと曲げ伸ばしされる。絶頂の余韻でひくついてゐる膣壁が、その動きにまた、ぴくぴく♡と反応してしまう。

「あ……っ♡、待って、まだ、ひいっ♡」

彼の指は、止まらなかった。

彼の指が、私の中で二本に増えたまま、ゆっくりと曲げ伸ばしされる。絶頂の余韻でひくついている膣壁が、その動きにまた、ぴくぴく♡と反応してしまう。指の腹が前壁のしこりをぐにっ♡と押し込んでくると、達したばかりの身体は、もう次の波の予感に勝手に勝手に震え出した。

「ふぁ……っ♡、ま、まって、休ませてっ♡」

息も整わないうちに、彼の指がもう一度、私の中の弱い場所を探り始めていた。私が首を振っても、腰が引けても、彼の指は逃がしてくれない。ルシフェルがゆっくりと、私の中から指を引き抜いた。

ぬぢゅ……っ♡

二本の指の表面に、糸を引くほどの愛液がまとわりついていた。彼はそ

れを私の目の前で、見せつけるように指を開いて広げる。透明な糸が、二本の指の間でぴんと張って、やがてぷつり♡と切れて、シーツの上に落ちた。

「これだけ濡らしておいて、まだ休みたいのか」

その低い声に、頬が燃えるように熱くなった。

彼は引き抜いた指を、自分の口元に持っていった。私の愛液で濡れた二本の指を、彼の唇が、一本ずつ、ゆっくりと舐め取っていく。舌先が指の腹をなぞり、根元まで舐め取り、最後にちゅっ♡と短く吸って音を立てた。

私の身体から出たものを、彼が当たり前のように味わっている光景に、頭の芯が痺れた。

「美味しい」

短い感想が、私の理性を一段、削ぎ落とした。

ルシフェルが寝台の上に膝をつき、ゆっくりと身を起こした。

彼の指が、自分の絹のシャツの胸元の紐に伸びる。一度ほどかれた紐が、しゅるりと音を立てて解け、シャツの前が大きく開いた。私の視界に、白暫の胸板が現れた。

予想していたよりずっと、鍛えられた身体だった。だが、それ以上に私の目を奪ったのは、その肌の白さだった。生身の人間でこれほどの白さは見たことがない。陶磁器の表面のようでありながら、確かに血の通った皮膚で、燭台の灯りに照らされて、薄く影を落としている。

彼がシャツを脱ぎ捨てた時、何かが視界の端を掠めた。

漆黒の――翼のような、影。

肩甲骨の少し下、背中あたりに、確かに何か濃い影があった。けれど、私が確かめる前に彼の身体が動き、その影は再び見えなくなった。代わり

に私の意識を引き寄せたのは、彼が下穿きを下ろしたときに現れた、彼自身の姿だった。

息が止まった。

大きい。

いきり立ったそれは、彼の腹に届きそうなほど反り返り、先端からは透明な雫が一筋、糸を引いていた。茎には太い血管が浮き、根元には銀の和毛が生えそろっている。私が見たことのある類のものではなかった。

あれが、私の中に入る。

その事実を、頭が拒みかける。けれど、身体のはうは違った。先ほどから疼いていた腰の奥が、彼の姿を視界に入れた瞬間、きゅう♡と強く収縮し、新しい愛液をとろり♡と溢れさせていた。

ルシフェルが私の身体に再び覆い被さってきた。

仰向けに横たえられた私の両膝の裏に、彼の手が掛かる。ゆっくりと、左右に大きく開かされた。先ほどよりさらに大きく、太腿が腹のほうに押し付けられるくらいまで。秘所が完全に、彼の前に晒される角度。

彼の片手が自身を握り、先端を私の入り口にあてがった。

ぬちゅ……っ♡

亀頭のが、愛液まみれの割れ目をなぞる。クリトリスから膣口まで、上下に二度、三度。先端の張った縁が、敏感な部分をすべて掠めていく。

「ひあっ♡、あ、ああ……っ♡」

たったそれだけで、声が裏返った。

ルシフェルが私の顎をすくい上げた。紅い瞳が、すぐ近くで私を見ていた。